

「行政の維新プロジェクト」 市民の反撃はじまる！ 値上げ条例も継続審議へ

吹田市では、いま、井上新市長による「行政の維新プロジェクト」がすすんでいます。「事業見直し」と称して、公立保育園の一部民営化や福祉バスの「廃止」、障害者サービス「縮小」、再生資源回収事業報奨金「縮小」などが市民不在のまま、すすめられようとしています。ですが、地域の自治会や子ども会、保育園の保護者、障害者とその家族をはじめとする各地域・各層から撤回や再考を求める要望書などが寄せられています。短時間のうちに提出された署名などは44種類、福祉バス存続や公立保育所民営化反対など、それぞれ1万筆を超える署名も提出されています。

吹田

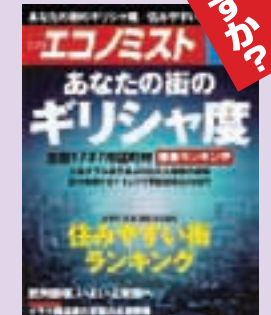
公立・私立ともに保育園の拡充を

街なかにも響く「子育てするなら吹田を守ろう」の声
昨年12月4日、労働組合や保育園団体、障害者団体などがよびかけた「吹田の子育て、福祉を守り、拡充する大パレード」に、親子連れも含む市民250人が参加しました。「子育てするなら吹田を守れ」「障害者の声を聞かずにサービスを削るな」「公立保育園の民営化反対」などのシュプレヒコールを響かせながら、サンタクロースとともに色とりどりのノボリや横断幕、プラカードを持って、さ

表された平成22年度の決算状況では、1億5千万円の赤字であることがすでに明らかになっています。「赤字」と市民を脅して、市民サービスの削減方針を打ち出す井上新市長が、次に手を付けたのは市民に負担を押しつける使用料・手数料・自己負担金の値上げ計画です。幼稚園の保育料や体育館の使用料、市民センターの使用料、市民プールの使用料などの値上げを行い、2億円を超える歳入増を目論んでいます。12月議会では、議論不十分と値上げ条例は継続審議という結果になりましたが、値上げ条例は、4年前、阪口前市長が同様の値上げをしようとしたものの、議会の理解が得られず、取り下げた経過があります。

吹田市の財政状況が「赤字」ではないことが明らかになり、市民生活の厳しさは増す一方であるのに、2億円もの負担を市民にお

ギリシャ度(借金度)の低さ 全国28番目の吹田市



週刊エコノミスト12月13日号の借金「ギリシャ度」(実質公債比率)のランキングの記事においても、吹田市の借金度は全国市町村1737のうち、1709位で、下から数えても28番目です。客観的に見ても、吹田市の財政が「非常事態」ではないことがハッキリしました。

しつつける大義名分はどこにもありません。井上新市長がいう「持続可能な市民満足度の高い市政」像も、その実態は不明朗です。市民サービスを削り、痛みと負担を市民におしつける「行政の維新プロジェクト」が市民の声や要求と逆行していることがこんなにもうきほりになっているのに、それでも市長は、ごり押しするのでしょいか。



JR吹田から阪急吹田まで行進しました

されていきます。保育行政から吹田市の公的責任を後退させるのではなく、待機児解消を含めた子育て支援拡充を求める声が強がり、結成の運びとなりました。

「2重庁舎」のムダづかい



WTC訴訟の会のみなさん

「橋下さん、96億円かえして」という横断幕を持ち、大阪地方裁判所へ入場しようとしているのは、「WTCビルの購入と庁舎移転で費やされた巨額の税金を、橋下前知事から取り戻す会」(以下WTC訴訟の会と略)の原告団。橋下市長はよく「2重行政を解消する」というが、彼自身の失政によって大阪府は「2重庁舎」になった。大手前と咲洲に分かれたため、今後30年で約1300億円もの無駄な経費がかさむ。さらにWTCビルを今後も使うとするなら、耐震工事は130億円もかかるという報道まである。

さらに地震学の専門家は、南海・東南海地震が来れば、咲洲自体が陸の孤島になると警告する。咲洲は埋め立てで作られた人工島なので、陸側につながるトンネルや電気ケーブル、水道管は破断するとの予想だ。もちろん液状化の懸念もある。

橋下前知事が、WTCビルに庁舎を全面移転しようとしたとき、大阪府議会は2



(日刊スポーツ 2012年1月13日付)

現在の大阪、失業や倒産、生活保護受給者の増加など、住民生活、大阪経済の明らかな危機。この危機に、なぜか「大阪都で一からつくりかえるしかない」と橋下・維新の会は「白紙化」を宣言。大阪府、大阪市の解体、地下鉄やバスの民営化、カジノ特区へと突き進む。「ショック・ドクトリン」大阪版が現実

に目の前で繰り広げられている。結局、人体実験は失敗する。「白紙状態」などつくりだすことはできず、被験者の精神はズタズタの状態に陥った。惨事便乗型資本主義が残したのも、多くの死者や瓦礫、貧困と格差であった。豊富な取材・調査にもとづく内容はご一読いただくとして、「大阪版ショック・ドクトリン」の正体は、大阪住民自らの手で暴かなければならない。橋下・維新の会にズタズタにされる前に。(ともはる)



フォーカス focus

「大阪秋の陣」ー大阪府知事・大阪市長ダブル選挙以来、現在もまだ浮かれない報道が続いているが、偶然読み始めたナオミクライン著「ショック・ドクトリンー惨事便乗型資本主義の正体を暴く」(岩波書店、2011年)に、橋下・維新の会の姿を再確認した。

1950年代、洗脳や拷問の精度をあげるため、カナダの大学がアメリカCIAの資金援助のもとで行った人体実験。それは、電気や薬物による過剰な「ショック」を繰り返し与え、「白紙状態」をつくりだし、そこに新しい「人格」を植えつけないというものだった。

1970年代以降新自由主義の経済学者、多国籍企業や富裕層たちがこれを社会に適用した。自然災害、テロ、クーデター、戦争、恐慌など人々の「ショック」状態に乗り、徹底した民営化、規制緩和、福祉や医療など社会支出の削減で、自らの利益に結びつく市場原理主義の社会システムを世界のあちこちで構築してきた。称して「ショック・ドクトリン」ー惨事便乗型資本主義である。

現在の大阪、失業や倒産、生活保護受給者の増加など、住民生活、大阪経済の明らかな危機。この危機に、なぜか「大阪都で一からつくりかえるしかない」と橋下・維新の会は「白紙化」を宣言。大阪府、大阪市の解体、地下鉄やバスの民営化、カジノ特区へと突き進む。「ショック・ドクトリン」大阪版が現実

に目の前で繰り広げられている。結局、人体実験は失敗する。「白紙状態」などつくりだすことはできず、被験者の精神はズタズタの状態に陥った。惨事便乗型資本主義が残したのも、多くの死者や瓦礫、貧困と格差であった。豊富な取材・調査にもとづく内容はご一読いただくとして、「大阪版ショック・ドクトリン」の正体は、大阪住民自らの手で暴かなければならない。橋下・維新の会にズタズタにされる前に。(ともはる)